

# 無量寿

【発行】雲夢山寿命寺

2019  
夏

## CONTENTS

[P1] 巻頭言/仏教講座告知 [P2-7] 2019年永代経法話録  
[P7] 報恩講告知 [P8] 2020年 年忌繰出一覧

大津市雄琴 3-19-36 TEL/FAX 077-572-5125 <https://jumyouji.net/>

## 浄土真宗の「お盆」

お盆は一般にご先祖様が帰ってくる期間と考えられています。でも浄土真宗ではご先祖様は仏さまとなって、いつでもどこでも一緒にいてくださると味わいますから、この期間だけお迎えしたりお見送りすることはしません。

ではお盆なんて必要ないのかと言えば、そうではありません。「いつでもどこでも」と言われたら、つい感謝の心を忘れてしまうのが私の有り様です。空気がなければ生きていけないのに、普段その存在を意識することがないように。だからお盆という特別な期間にしっかりとご先祖様に思いを馳せて、いつでも一緒にいてくださることに改めてお礼申し上げるのです。

そしてご先祖様をそうせしめるはたらきの源、阿弥陀如来への報謝も忘れぬよう、お墓だけでなく、お家のお仏壇、あるいは寿命寺の本堂にもお参りいたしましょう。

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。

## 【告知】仏教・真宗講座、始まります！～9月から全4回開催～

このたび新たな試みとして、仏教や真宗の基礎を学べる講座を始めます。

永代経や報恩講でお聴きいただいている「法話」は、阿弥陀如来の救いの有り難さを「味わう」ことに主眼がおかれ、ともすれば聴聞者が皆、浄土真宗の基本的なことを理解しているという前提で話が進む事が多いように思います。

でも実際は、「阿弥陀如来って誰?」「南無阿弥陀仏って何?」といった、今更聞きにくい疑問を抱えたまま話を聴いている人もいらっしゃると思います。今回の講座は、正にそうした疑問を学ぶ場として企画しました。

ご講師は住職の龍谷大学時代の同級生で、現在は宗派の教学研究員で龍大・京女の講師としてもご活躍の西先生にお願いしました。テーマや各回の内容は下記の通りです。受講料無料でどなたでも受講できますので、寿命寺門徒以外の方にもお声がけください。たくさんの受講、お待ちしております。



寿命寺仏教・真宗講座

### 「うちはどうして、 南無阿弥陀仏なのか」

- 【第1回】9/25(水)「法然聖人からはじめる南無阿弥陀仏」
  - 【第2回】11/27(水)「法然聖人から教えられた『浄土真宗』」
  - 【第3回】1/22(水)「危険視された南無阿弥陀仏」
  - 【第4回】3/25(水)「それでも宗祖が親鸞聖人な理由」
- 各回とも 19:00～21:00 於 寿命寺本堂 ※受講無料

【講師】西 義人 Nhishi Yoshindo

1973年生まれ、北海道出身。

龍谷大学大学院真宗学専攻博士後期課程  
単位取得退学、本願寺派宗学院卒業。

現在、浄土真宗本願寺派  
総合研究所 上級研究員、龍  
谷大学非常勤講師、京都女子  
大学非常勤講師。



二〇一九年 永代経 法話録

# 「五重の義」

釋迦浩爾(しゃかこうじ) 師

(滋賀県高島市浄願寺)

五月十二日にお勤めした永代経、ご講師には蓮如上人の御文章の「五重の義章」をテーマに、昼夜二座に渡ってお取次ぎを頂きました。その要約をお届けします。



「これによりて五重の義をたてたり。一つには宿善、二つには善知識、三つには光明、四つには信心、五つには名号。この五重の義、成就せずは往生はかなふべからずとみえたり。」

こんにちは。高島の鹿ヶ瀬から参りました釈迦と申します。ご讚題に頂きましたのは蓮如上人の『御文章』の「五重の義章」の一節です。皆さんが今こうしてお念仏されるようになったのには、五つの事柄が関係していると仰っています。そし

て逆にその五つが揃っていないければ往生はかなわないとお示しです。今日はその五つの内容を皆さんと一緒に確認していきたいと思います。

## 宿善く人間に生まれるということ。



まず一つ目は「宿善」です。これは「世の善因縁」

を略した言葉です。仏教では六道輪廻といつて私達は六つの世界を生まれ変わり死に変わり、延々とそれ

を繰り返していく存在だと説かれます。六道とは地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天です。

## 地獄とは過

去世の悪行を鬼に責められ苦しみ続ける世



界です。餓鬼は飢えの世界。食べ物や水を口にしようとするが燃えてしまします。畜生は動物の世界です。本能ばかりで礼を知らない世界です。修羅は互いに他を従わせないと気がすまないで、争いが絶えない世界です。人は言うまでもなく人間の世界。今、私達のいる所です。そして天は天上の世界です。楽しみに満ち溢れていて一見良い世界に思われますが、終わりが訪れます。楽しみが多い分終わりを恐れ苦しめねばなりません。

仏教とはこの六道輪廻から解脱

して浄土に生まれ、覚りを開いて仏になる道を説くものです。そしてそれを聞けるのは唯一、この人間の世であるといわれます。地獄や餓鬼は苦しくて仏さまの話など聞いていられません。逆に天界は楽しさにかまけて誰も耳を傾けません。その意味で今生人間の命を頂けたというのは大変貴重なことで、それは宿世(前世)に善い因縁があったからだというのが「宿世の善因縁」です。謂わば仏道のスタートに立たせて頂いたということです。

## 畜生は往生できない？

ところで畜生、動物には仏さまになる縁はないのでしょうか。結論を言えば、動物がこの世の命を終えたとしても、そのまま浄土に行

けるとは仏教では説かれません。六道はどれも自己中心で我が事しか

考えられない者たちが経巡る世界です。でも辛うじて人間に生まれて

仏さまの言葉に出会うことができ

たなら、我だけの世界ではなかった

と知らされ、ようやくお浄土への道

筋をつけてもらえるのです。だから

人間以外の生き物がそのままお浄

土へ行ける道理は仏教にはないので

す。

皆さんの中にも犬や猫を家族同

然に可愛がられている方もあると

思います。そういう方からすると動

物はそのままでは浄土に行けないな

んて随分冷酷に聞こえるかもしれ

ません。では心を通わせた動物と

の別れをどのように受け止めたらい

いのでしょうか。

本願寺の勧学、浅田正博先生の

本にこんなエピソードが書かれてい

ました。



かつて講師を勤めた京

都の中央仏教学院に、

ある日文鳥が舞い込

んで来ました。後に学長になる白

川先生という方がこれを保護したの

ですが家には赤ちゃんがいて飼えな

い。それで当時お子さんがなかった

浅田先生に託されました。浅田先

生は鳥を飼ったことなどなかったの

で最初はどのようにしていいかわからず一

日中ゲージに閉じ込めて飼っていま

したが、そのうち慣れてきて開けて

飼うようになり、やがて一日中家の

中を自由に飛んでいても平気になり

ました。とても賢い鳥で暑い時は

クーラーと奥さんの間を往復して

催促したり、食器を洗っているたら  
いに飛び込んで水浴びをしたりする  
そうです。ゴン太と名付け、夫婦で  
大変可愛がられました。  
でも2年ほどして、ゴン太は亡く  
なつてしまいます。寿命でした。そ  
の時学校の広報誌に執筆する機会  
があり、そこでゴン太にこう呼びか  
けました。「次は人間に生まれて聴  
聞してください。そしてお浄土で会  
いましょう」。ところがこれを読ん  
だ白川先生に「生き物に上から目  
線で、今度は人間に生まれろと言  
うのは仏法を頂く者の味わいとは  
違います。仏法はどこまでもこの私  
が味わうものです」と窘められたそ  
うです。それで浅田先生は「そうだつ  
た。あの小さな命は私達と二年間  
過ごしてくれて、生き物の生老病  
死を教えて去つていった。私は人間

に生まれながら不自由なく仏法を

聞くことができるのに、懈怠の心で

そうしていなかった。明日も知れぬ

我が身、しつかり聞けよと、ゴン太

はそう催促してくれていたのだ」と

思い改められたということでした。

**善知識く私を揺り動かすはたら**  
**き。**

このエピソードには宿善の味わい

と同時に、五重の義の二番目の「善

知識」のお話が含まれています。善

知識とは良い先生という意味で、

私を仏教に誘ってくださる存在のこ

とです。先生と聞くと自分より年

上の教養ある方をイメージします

が、そうとは限らないのです。先程

の文鳥のような人間以外の小さな

命であっても、私を揺り動かし仏

道へ導くならば、それは善知識と

仰ぐべき存在なのです。

## 平安時代の

歌人、和泉式

部が娘を三つ四

つの幼さで亡く

しました時に

詠んだ歌です。



「子は死してたどりゆくらん 死出の旅道しれずとて 帰りこよかし」。

おかあちゃん、うち道分からへん。

そう言つて私の元に戻つてきてくれ

ないかという悲痛な母の歌です。あ

の子は今どうしているのか誰が教え

てほしい。その問いは生きている人

間に聞いても分かるわけもなく、

彼女はいつしか仏法に耳を傾けるよ

うになります。

やがて数十年後にこんな歌を詠

みます。「夢の世に あだにはかな

き 身を知れと 教えて帰る 子

は知識なり」。二つの歌の「帰る」

という言葉に大きな転換が見られ

ます。最初は私の所に、こちらに帰つ

ておいでと願っていたのが、あの子

が帰つていった世界に私もやがて

帰つていくのだと、方向が転換した

のです。帰る場所、世界があると

聞くということが、今この命の意味

を大きく変えるのです。そしてそれ

を知ることと安心させて頂く。そ

こに宗教の意味があり、そこへ導い

てくださる方のことを善知識と呼

ぶのです。

今年の一月、うちの在所で十四歳

の女の子が交通事故で亡くなりま

した。私の息子と同級生で小学校

の頃からお寺の日曜学校に通つてく

れていた子でした。私は僧侶として、

誰しも命を終えていかなければなら

ず、しかもそれはいつとも知れない

と、常々仏法に聞き、ご門徒にも

そう話してきました。でも彼女の

訃報を聞いた時、私は涙を流しな

がら立ち尽くすより他ありません

でした。

それでも棺の中の彼女の手に、

日曜学校に入ってくれた時にお寺か

ら贈ったお念珠がかけられているの

を目にして、ああ六年間日曜学校

に通つてくれて良かったとおもいま

した。いつも私が仏さまのお話を教

えていたつもりが、逆に私が教えら

れていたのだなと思ひ至りました。

私は懈怠して数年先まで当たり前

のように予定を入れている。けれど

も本当は今日とも明日とも知れな

い身であつたと、揺り動かされたの

です。彼女もまた私の善知識であ

りました。

でも別に亡くなった方のみが善知

識というわけではありません。おじい

さんおばあさんの後ろ姿、お父さ

んお母さんの言葉、友達の行動。

私を揺り動かし、本当の大切なこ

とへと向かわせるきっかけ、はたら

きは全て善知識と頂くことができます。

誰にでもそれぞれの善知識が

いてくださるはずで。一度思い巡

らせてみてください。

## 光明く既に届いている光。

五重の義の三つ目は「光明」です。

阿弥陀さまの智慧のはたらきを光

に譬えています。往生の条件の一つ

として光明と聞かされると、その

光を探し求めて進まなくてはなら

ないと思われるかもしれません。け

れど宿善によつて人間に生まれ、

善知識に導かれて仏さまの言葉に

耳を傾けるようになったならば、



既に仏さまの方から私を照してくださっていたことに気づくはずだ、というのが蓮如上人がここに光明を挙げられたお心なのです。

とは言え物理的に見える光ではありませんから、私達はなかなか気づけません。でも、例えば風も目には見えませんが、木の葉が揺れるのを見てその存在を知ることができます。同じように仏さまの光を直接見ることはできなくても、それに照らされている人の姿を通して、私のもとにも届いていると気づかせていただくことができるのではないのでしょうか。

以前勤務し



ていた山科別院はボーイス

カウトをやっていました。ある日とつくに活動時間は終わっているの

に二人の男の子が境内をうろうろしていました。一人の子がリュックサックをなくしたので友達と探していたのです。後で知ったのですが、

実はその時点でお母さんがリュックを持ち帰っていたのです。だからどこを探しても出てくる訳はないのですが、それを知らない私を含めた三人は一生懸命探しました。やがて日が暮れてきて、最後に一縷の望みを抱きながら事務所を探しましたが、やはりありません。その時無くした本人が「ああ！おかあちゃんに怒られる。神も仏もあるものか！」と叫んだのです。もちろん冗談のつもりだったのでしょう。でもそれを横で聞いた友達がきつぱりと言いました。「いや、阿弥陀さんは見てはるで」と。

その子は小学校三、四年でした

が幼児の頃から山科別院のスカウトに入団し、毎週お寺で仏さまのお話を聞いてくれていたのです。私は

ああ、阿弥陀さまの光は確かにこの子に届いているのだなと思い、思わず震えました。そして同時に、それならばやはり私にも届いているのだと感ずることができました。



親鸞聖人の御

和讃に「智慧の

光明はかりなし、有量の諸相ことごとく、光

はなし、真実明に帰命せよ」とあります。光暁とは明け方の光です。

私は阿弥陀さまの光明に照らされても、煩惱の闇が深く薄明かりに

しか感じられない。でもそれは夕暮れの薄暗さとは違う。これから必

ず明るくなる。如来の願いに出会ったなら、もう後戻りはしないという意味が込められているのです。

**信心く如来の心を頂く。**

光明が既に私に届いているということをもそのまま聞く。これが四つめの「信心」です。一般に信心とは私が神や仏を信じるという意味で、私の意思によるものと考えられているでしょう。でも浄土真宗では「御信心」といって、それは阿弥陀さまから賜うものとされます。私が信じていると力んだところで、それは何かの拍子に疑いに一転します。奥さんがご主人に「あなた、信じてますよ」とわざわざ言うのは、疑っているんですよね。

山科別院に勤めていた時の上司で、京都八幡のご住職、横田正純

さんに聞いた話です。おばあさん仲良し二人組が



「ちよつと聞いて、この人信心深いんや」と仰る。なんでもその信心深いと言われるおばあさん、孫が受験なので遥々京都の北野天満宮まで、バスを乗り継いでお守りを求めに行つたそうです。その帰り、バス停のそばに祠があつて、ここにもお願いしておこうとお参りされた。さらにバスが四条通まで来た時、八坂さんが見えたので慌てて途中下車して、そこにもお参りされ、それでようやく帰つてこられた。その話を聞いて、一日にそんなにたくさんお参りして、あんたはほんまに信心深いなあとお友達が感心しておられたということなんです。でもそれを聞いたごえんさん、口には出さな

かつたけど心の中で「それは信心深いのとちよつて、疑い深いんや!」とツツコミをいれたそうです。

「わたしの信心雪だるま オテントさま出りやすくとける オテントさまがご信心」これは木村無相という方の詩です。先程のおばあさんは最初の神様では物足りず、雪だるまを大きくするようにペタペタと神様を足していかけた。でもそれは疑いの心を足しているに過ぎないのです。だからおテントさまが出たらたちまち雪だるまが溶けてしまうように、阿弥陀さまの光明に照らされれば私の疑いの心が溶けるんです。阿弥陀如来が「必ず救う」と仰るその言葉を、そのまま聞いて頂くのが「御信心」です。私が信じるから間違いないのではなく、阿弥陀さまがいらっしゃるから間違い

ないと頂けるのです。

### 名号〱御恩報謝のお念仏。

そして信心を頂いたなら必ず仏さまの名前を称えずにはおれなくなる。それが五重の義最後の「名号」です。既に助かると聞いているのだから、今更助けてとお願いする必要はありません。ただ感謝から溢れるのがお念仏です。

蓮如上人のエピソードです。ハチが飛んできて隣の人が思わず叩き潰しましたが、その人が「なんまんだぶ、なんまんだぶ」と念仏したそうです。蓮如上人が今のはどういう意味の念仏かと聞くと「可哀想なことをしたと思つて」と言うので「念仏とはそういうものではない。御恩報謝のものだ」と窘められたということです。



ハチを潰した人は自分が潰したことでその生命はまた六道を巡ることになる。気の毒なことをした。せめて今度こそは人間に生まれて六道を超えてくれよという願いを込めて念仏したのでしょう。要はハチのために念仏を使つたのです。でもそもそも私のものではない念仏を勝手にハチに使うのは筋が違います。あくまで阿弥陀さまにお礼を申し上げるのが念仏の心だぞと、蓮如上人はそう仰つたわけです。

私の息子が小学三年生の時の夏休みの話です。朝、私が本堂の掃除をしていたら息子が寝起きのままの姿で、つまりパンツ一丁で本堂に駆け込んできました。何の気もない行動だつたと思いますが、私は「こら!そんな格好で本堂に来るやつがあるか!」と一喝しました。す

ると息子はバツの悪そうな顔をし  
ながら阿弥陀さまの正面に座つて  
「なんまんだぶ、なんまんだぶ」と  
お念仏し始めました。私は「こら！  
パンツ二丁でお念仏するなんて！そ  
んなんで謝つてゐるつもりか！」とま  
た叱りました。お念仏してる人に  
向かつて「こら！」と叱るなんて後  
にも先にもありませんが、息子が  
「謝つてゐると違う！ありがとう  
や！」と言い返してきたのを聞いて、  
もう叱れなくなりました。いつの間  
にか、ちゃんと仏さまの話聞いて  
いてくれたんやなと、我が子ながら  
感心し嬉しく思いました。

子どもは羞恥心がないからパンツ  
二丁でも平気で阿弥陀さまの前に座  
れます。でも私達大人はお参りす  
るなら、なるべくきちんとしようと  
身なりを整えてお参りします。で

もどれだけ格好を装つても心の中  
まで阿弥陀さまはお見通しです。  
だから阿弥陀さまの前に座るとい  
うのは仏さまの眼差しを通して、  
自分の心に向き合うことでもあり  
ます。その意味では手を合わせて念  
仏させてもらうというのは、厳しい  
行為とも言えるでしょう。でも逆  
に言えば、とくにお見通しなのだ  
から心まで取り繕う必要はないので  
す。どろどろした心もそのまま包

み込んで掬い取ると仰つていので  
す。それを聞いて感謝のお念仏を申  
せば、そこに安心が生まれます。  
でも私達はどうしても懈怠の心が  
勝つて、お念仏するのを忘れたり  
怠つたりします。だから暮らしの中  
で念仏するよう、意識して務める  
ことが大切です。

知識、光明、信心、名号の縁が重なつ  
てようやくお念仏させてもらえる  
身にしていたいたのです。つまり  
他力のはたらきによつてようやく私  
に届けられたのが「南無阿弥陀仏」  
のお念仏なのです。せめてもの恩返  
しとして精一杯称えさせていただきます  
ましょう。今日はようこそお参  
りでした。南無阿弥陀仏、南無阿  
弥陀仏。

【告知】

## 親鸞聖人報恩講

10/26(土) 14:00、19:00

10/27(日) 10:30、13:30

【講師】 藤澤信照 師

(東近江市 浄光寺住職 / 本願寺派布教使)



報恩講は親鸞聖人の御恩に感謝する法要で  
すが、広げれば私にお念仏を届けてくださった、  
ご先祖様をはじめとする全てのご縁にお礼申し  
上げる法要です。

今回のご講師の藤澤先生は、本山や別院で  
の布教も数多く、大変著名な布教使です。身  
近なところで話が聴けるのは大変貴重なこと  
です。たくさんのお参りおまちしています。

## ご家庭でも報恩講を！

お寺だけでなく、各ご家庭のお仏壇でも報恩  
講をお勤めください。ご不明なことは住職まで。